二〇一九（平成三十一）年度 日本文学専攻博士論文・修士論文 日本文学専修卒業論文一覧

博士論文

晩年の室生犀星の文芸における関係的な様相の研究　米山大樹

八代集における形容動詞について　謝静

焼跡文学論
——語りえない〈空白〉を語ること——　渡部裕太

安部公房小説作品研究
——1960～70年代をめぐって——　河田綾

修士論文

インドネシア語における語彙研究
——日本語学の視点から——　青柳沙恵

太宰治の短編小説における「疎開」の描き方
——「やんぬる哉」「たづねびと」「親友交歓」を中心に　舘山茂樹

江戸川乱歩作品論
——「苦楽」掲載三作を中心に——　入山洸希

橋姫伝承の研究
——「待つ女」像の検討　河合恵

葵の上の持つ存在意義
——各人物との関係の変化に注目して——　岡元文音

日中韓聖書翻訳における漢語の意味的異同　キムコンクック

一九五〇年代における三島由紀夫の戯曲
——「薔薇と海賊」「白蟻の巣」「熱帯樹」をめぐって　史珍

現行法律用語の研究　ソウカゲン

石川淳戦後小説における女性像とアレゴリー性
——「黄金伝説」「処女懐胎」を中心に——　叶子清

江戸川乱歩におけるチャールズ・ディケンズの受容
——乱歩邸蔵書から見る　トウランシュウハ

「塚本邦雄」論
——初期歌集の様態と作品の分析——　瀬口真司

卒業論文

島崎藤村『新生』について
——「新生」は達成されたか否か——　石川正太郎

児童文学に描かれる理想の親子関係　加藤待望

谷崎〈母恋い〉文学のマゾヒズム
——「美」のイデアと母　田中未織

坂口安吾「花妖」における女性像
——「青鬼の褌を洗う女」へと果たした役割　平澤眞実

近代社会における広津柳浪の悲惨小説とその受容　林葉月

「蓼喰う虫」・「細雪」からみる谷崎作品の女性像及び時代背景について　伊藤日奈子

田山花袋『田舎教師』林清三の人生を振り返る　川端淳史

創作『決められた破滅』
補助論文「ロウソクが放った光の境界線」　野村直広

洗う／洗われるサチ子
——坂口安吾「青鬼の褌を洗う女」論——　稲冨圭夏

太宰治「女生徒」試論
——「幸福は一夜おくれて来る」　長藤菜々

小沢健二と「渋谷系」の音楽性の変遷に関する考察　亀井歩未

「鏡地獄」論——「彼」の破滅の正体——　中村淳吾

中原中也「春日狂想」論
——その死意識と視線意識　佐々木稜馬

武田泰淳『ひかりごけ』
——戯曲における「光の輪」が点る人物たち　笹井志緒里

時任謙作と終わりなき「行路」
——志賀直哉『暗夜行路』論——　瀧上幸子
三島由紀夫「命売ります」試論　望月あかり
固められた世界の中で
——梶井基次郎「檸檬」論　小林菜摘
宇野浩二の〈屋根裏〉の世界　宇佐川奏子
『蜻蛉日記』における「思ほえぬ」の和歌の考察
——「なでしこの花」の役割とは何か——　柳河泰周
六条御息所生霊考
——あくがる魂と心の葛藤——　齊藤みのり
夜食時分作品の再検討　篠田悠
お伽草子『戒言』について
～『富士山の本地』との比較により見出される金色姫の独自性～　田端美冴
『諸艶大鑑』と遊女評判記
——虚構と現実の描かれ方について——　堀田桃香
みなもと　野崎祐衣
四の君の結末から見る『とりかへばや』のアイロニー
——『源氏物語』の女性たちと比較して——　古山利恵

彙報

△学会ホームページでもお知らせしている通り、今年度の立教大学日本文学会大会は、立教大学で実施している新型コロナウィルス感染予防対策との関連から、延期と致しました。従いまして、例年本誌でご報告している立教大学日本文学会委員などは、本年度の場合総会の議を経ていない暫定的なものとなりますが、二〇二〇年八月五日にオンラインで実施致しました立教大学日本文学会委員会で以下の通りに決定しておりますので、ご報告致します。

教員委員
石川巧、井野葉子、加藤睦（会長）、金子明雄（事務局長・編集『立教大学日本文学』）、鈴木彰（編集『日文ニュース』）、平井吾門、水谷隆之（会計）

卒業生委員
阿久津智、五井信、小森潔、瀧田浩（監査）、出口久徳、長谷川範彰、安原眞琴

院生委員
事務担当：仲住若奈（チーフ）
編集担当：松本拓真（チーフ）

※博士前期生に関しては、全員が事務と編集に加わって作業をサポートする

なお、大会等、今年度の学会の活動につきましては、学会ホームページ等で適宜お知らせいたしますので、そちらをご覧ください。

訃報

本学名誉教授佐藤善也先生が二〇二〇年九月五日にご逝去されました。心よりご冥福をお祈りいたします。